

* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名 出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「河」初出と書誌	—	福永武彦全集 第2巻 附録他より (新潮社)	—	1	・初出：「人間」昭和23年(1948)3月号 ・単行 1. 「冥府」初版。昭和29(1954)年8月大日本雄弁会講談社刊。B6判、紙装、カバーつき。装丁 著者。本文254頁。内容：「冥府」、「水中花」、「時計」、「遠方のパトス」、「河」、及び「ノオト」(著者)。 2. 「塔」新版。昭和46年(1971)3月講談社刊。「現代文学秀作シリーズ」の一卷。四六判、布装。口絵写真一葉。本文294頁。内容：「塔」、「雨」、「めたもるふおおず」、「河」、「遠方のパトス」、「時計」、「水中花」、及び「解説」(天沢退二郎)。 3. 「塔」講談社文庫版。昭和48年(1973)6月刊。カバー装画 南桂子。本文264頁。内容は2に同じ。及び「解説」(白井健三郎)。 4. 「塔」河出文庫版。昭和59年(1984)11月刊。カバー装画 著者。本文260頁。内容は2に同じ。及び「著者ノート」にかえて福永文学の原点」(加賀乙彦)。
1	「冥府」初版ノオト	福永武彦	「冥府」初版 福永武彦全集(新潮社)第3巻に所収	1954/08	3 (全集)	この集の中の一つ古い「河」を書いたのは、昭和二十二年の九月から十月にかけてである。その頃僕は北海道の帯広にいた。生活に追われて北国に移ったのだが、この寒冷の土地での生活は僕の健康に悪かった。手術を受けなければ再起を保証しないと医者に宣告された。しかし帯広では胸郭成形手術の設備がなかったから、僕はその年の十月に上京し、東京療養所にはいった。「河」は、僕が上京を決意してから帯広で書き始め、上京の後に完成したものだ。この当てのない原稿は、幸いにして翌年三月号の「人間」に掲載されたが、伊藤整氏が親切な批評を新聞に発表された以外、何等の反響も見なかった。これは「塔」と同じ傾向のもので、謂わば夢の物語であり、完全なフィクションである。その当時、上林暁氏が、私小説作家はすべての作品を遺書のもりで書くと言われていたのを見たが、僕はそれを大袈裟に感じた。僕のような空想的な作風でも、作品は常に遺書の代りだったから。(引用)
2	対談・小説の発想と定着	福永武彦 菅野昭正	国文学 1972年11月号 対談集「小説の愉しみ」(1981)所収	1972/11		菅野 「忘却の河」の主人公の幼時の記憶とか、小説の世界で「河」のもつ意味というのは、非常に大きいように読めるのですが。福永 ええ、「河」では大きいですね。だけれど、その前の「塔」なんていうのには河は全然出てこないでしょ？ ですからそれは作品次第です。「河」では一種の、此岸と彼岸ですか、こちら側と向こう側ですね。要するに、向こう側は「夢の世界」「マラルメ」的な「夢」ですね。そういう意味では、河は此岸と彼岸とを暗示するもので、「流れてゆくもの」という感じじゃないと思うのです。「心の中を流れる河」では、そうじゃなくて「流れてゆくもの」としての河で、それはつまり、「心」というものが流動するものであるという意味で、人間の内面を一種の河にたとえたわけでしょう。「忘却の河」もそうだと思うのです。 菅野 そうですね、象徴的な意味の河ですね。 福永 ですから、同じ河でもそういう二つの見方がある以上は、もちろん河の出ない作品も多いのだから、ぼく自身が河というものに対して、一種のオブセッションもっているとはいえないと思いますね。(引用)
3	福永武彦全小説 第2巻 序	福永武彦	福永武彦全小説 第2巻 福永武彦全集(新潮社)第2巻に所収	1973/08	3 (全集)	昭和二十一年の冬の初めに、病気が再発して中学に通うことが出来なくなった。私は寝たり起きたりしながら、それでも頑張って二三のエッセイを書いた。翌二十二年の春、やはり寝床の中で「めたもるふおおず」を書いた。何かしら憤(いきどお)ろしいものが胸の中に溢れているが、それに正確な形を与えることが出来なかった。五月からまたサナトリウムに入って検査を受け、東京へ行って胸郭成形手術を受けない限り命の保証はしないと宣告された。そこで七月にはもう退院し、それから東京郊外清瀬村の東京療養所に入院中の友人と連絡を取って、十月に上京して直ちに入院した。「河」はその夏に書き始め、入院直前までかかった。前の三作(注)がいずれも当てのない原稿で発表は友人に任せきりだったのに対して、「河」はものさえよければ一流の雑誌である「人間」に載せてもらえうだと分っていたから、以前の作品より自分の持味を出すようにつとめたところがあった。 これらの四作が、私が長期の療養所生活を送る以前の作品である。私は昭和二十二年十月から二十八年三月まで足掛け7年間東京療養所にいた。その間にした仕事はほんの僅かで、「風土」を完成した以外は、小品を三つと短篇を一つ、ただそれだけにすぎない。(引用) 注)「塔」、「雨」、「めたもるふおおず」の三作を指す。

2 単行本

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦論	小佐井伸二	戦後文学「展望と課題」 (編:小久保実) 日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」(1978) 所収	1968/2	10 (再録 時)	その美しい小品は福永武彦における河のイメージの象徴性をわれわれに解き明かしてくれる。(中略)すなわち、「僕」という少年のいる河のこちら側は、冥府である。— 汚い町並、荒れはてた野原、そのなかの木に群がっている鴉。そして少年のいない河の向こう側は、生、やはり作品『冥府』のなかの言葉を借りれば、新生の判決を受けた者のみが生きうる真の人生である、それゆえに、『河』は、数日の後、僕は父親の忠告の通りただひとり河を渡り、世の中に、生きている者だけが生きている世の中に、旅立ったという言葉で終るのだ。言葉の比喩的な意味においての生と死との境界、それが河である。(引用) * 下線部は、原文では傍点。

3 文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦の風土に関する 試論	源高根	国文学 1972年11月号 特集 福永武彦	1972/11	7	河は、福永武彦氏の作品にもっともしばしば見られる風景の一つである。(この後に、『河』、『心の中を流れる河』、『世界の終り』、『飛ぶ男』、『高みからの眺め』、『忘却の河』からの文章が引用) 福永武彦氏のえがく河は、さまざまな姿をとって流れている。しかしそれは決して明るい日ざしのたわむれる美しいせせらぎではない。どこかに暗い深淵が待ちうける河、或いは澱み或いは夜も昼もゆっくりと流れてやまない冷たい河である。おそらくこれらの河は、どこそを流れる実際の河を描写したものではない。かつて福永氏の体験した河が、氏の内部に生ぜしめた幻想としての河であり、したがって一種の実在としての河であり、孤独な魂を自覚するものの中を流れる河でそれはある。(中略) 原体験というものがあるとすれば、それはおそらく無意識のものであるにちがいない。河という福永武彦氏固有のイメージの源泉を、福永氏が幼年時代の福岡にまったく記憶していないところに、むしろ原風景としてのそれがあつたことを、僕は福岡に行って強く感じたが、この考えは今も変わらないのである。(引用)
2	主要モチーフからみた福永 武彦	柘植光彦	国文学 解釈と鑑賞 1974年 2月号 憧憬の美学 堀辰雄と福永武 彦	1974/02	6	(「母」のモチーフについて) 福永武彦自身の過去意識における最大の欠落部分は、前項に述べたように、母の記憶である。したがって、無意識の領域を掘り下げて、意識に欠けたものを補おうとする福永武彦の創作方法に着目するが、その文学は、「母」を追い求める文学だとも見ることができる。 「母」は、福永作品のなかに、ありとあらゆる姿で現われる。次項の「少女」は母の最も純粋化された姿だが、「影の部分」では直接の欲望の対象として、「夢見る少年の昼と夜」ではメドゥサやデリラのように男を死へ誘う魅惑的な女神の像として、「河」では死者の国から自分に呪いをかけてくる憎しみの霊として現われてくる。(引用) (「河」のモチーフについて) 「風土」「廃市」「河」「形見分け」「死後」「死の島」などの作品にも、河は死のイメージと連関して描かれる。 福永武彦自身は、「繰返して見る河の夢の原型となるものは私にはどうしても思い当たらない」(「幼年」)と述べているが、ここには、結局この「夢の原型」は個人的なものではなく、土俗的、共同体的なものであろうと、とする示唆が読みとれる。 「忘却の河」ということは、すでに「風土」にもあらわれていた。この「忘れさせてくれる河」と、「渡らなければならない河」(＝三途の河)という、二つの河のイメージと、記憶や死の問題とを意識的に重ね合わせたものが、福永作品の「河」である。つまり、「河」とはおそらくは福永武彦が作画的に(文学的に)創造したイメージなのである。これをいって作家の実人生における河の記憶に結びつけようとする必要はない。 (「夕焼け」のモチーフについて) 「風土」「河」「樹」でも、夕日は死の観念と結びついてあらわれ、永遠をかいま見せる。(中略) こうした夕焼けは、福永武彦自身が述べるボードレールの詩のなかの落日の光景(「旅への誘い」)に近似しながら、さらに絵画的、超時間的である。それは時間が静止している風景であり、あらゆる記憶や意識が、死という一点にむかって凝結する風景である。 そしてこの「夕焼け」も、「河」と同じように、福永武彦が意識的につくりあげた風景であることは疑いをいれない。(引用)

4. 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	文藝時評	伊藤整	「世界日報」昭和23年4月13日	1948/04		(要旨) ・「河」は、どの国のどの時代の人間であってもいのように書かれ、また日本の文壇人によって書かれたという意識からも洗われており、日本の文壇小説とは別の系統の作品である。 ・文壇小説の伝統に反抗するには、純粋な抒情主義のために内面を向いて弱められている。主題そのものがあまり抽出が完全に出来たために、現世とのつながりを絶ち、作家の存在を背景に感じさせない。それによってこの作品は危うく死に瀕している。多分感受性に鋭い人が技術に独立した作品を作ろうとすると、こういう作品を作るのではない。 ・短篇小説というものは、しかしこういうものが原型であろう。もし現代に短篇小説を独立した形で書こうとするならば、それは或いは抒情詩的な手法によって、短いものとして完結する雰囲気の設定であるほうが妥当なのではあるまいか。「河」にもその方向への傾斜が感じられる。そしてもしそういう傾斜がもっと思い切って強かったら、この作品ももっと豊かな、それ自体の呼吸を強く感じさせるものになったかもしれない。
2	文藝時評	丸山静	「中京新聞」昭和23年4月17日	1948/04		「文藝」や「近代文学」による加藤周一、中村真一郎、福永武彦など一連のモダニストたちは、そのゆたかなフランス文学の教養を駆使することによって、文学における「日本よりの脱出」をはかっているが、それがそのスタイルの華やかさにもかかわらず、いかにもみじめな古い日本的現実への屈服に終わっているかは、たとえば福永の「河」（「人間」3月号）をみれば明らかである。（引用）
3	小説月評	十返肇	「新小説」昭和23年5月1日	1948/05		この作品はやはり同じマチネエ・ポエティックの加藤周一の「黄金の家」（思潮）などと共に、私には古くさく子供っぽいものに思われる。中村真一郎の「死の影の下に」がそうであったように「河」も少年時代の仮構的追憶の世界である。こういう作品は作者の方でもノスタルジアを抱きながら書き読者もまた無意識のうちに自己の少年時代をなつかしむ心をそこに投げるので極めて成功を得やすいのである。たぶん多少の文才さえあれば、誰にだって一篇は書けるだろう。（中略）この作品のどこに新しさがあり戦後作家らしい精神がある。これは近代インテリ文学青年のお伽噺、日本的現実の背を向け眼を反らせ、ノスタルジアの哀感による自己満悦でしかない。（引用）
4	創作月評	青山光二・高山毅・八木義徳・豊田三郎	「文藝時代」昭和23年5月1日	1948/05		「河」はなんだかとつきにくくて最初の一頁で投出した、とぼくの友人たちは口をそろえて言っていた。それは戦後文学の特質をよく知らぬからだ、ぼくは多少依怙地な気持ちになって読んでみたが、そのぼくにしてこの作品は余り高く買えない。プルーストの世界をくぐって来た作品ではあるが、どうもディレクタントの習作といった感をまぬかれない。（中略）「僕」の眼は少年の眼というよりも、作者の眼である。それはおかしいなどと、ぼくは野暮なことをいつつもりはないが、作品の世界にあってのアリテイは忘れるべきでなく、この作品の程度ではつくりものだとの感じが強い。（引用）
5	小説放談	田辺茂一	「文藝首都」昭和23年5月1日	1948/05		野間の観念、中村の奇手には感服できなかった私だが、こんどの新人福永武彦の「河」（人間）には感心した。岡本かの子を思った。行間に凄絶な妖気さえ漂い、人間宿命の悲しみが、大きく脈うっている。夕暮れどきの河の描写も素晴らしい。人生肯定も正しい。（引用）
6	「アプレ・ゲール」批判（文藝時評）	小田切秀雄	「新日本文学」昭和23年5月15日	1948/05		作者の関心が人間の現実の追及になく、前述の父親のような異常な人物を観念的に設定してこれとの関係において「少年小説」的な夢と感受性とを安ペンキで「文学的」に塗りたてる福永の方法自体こそ問題があるのだ。（引用）
7	第二の新人群	十返肇	「夕刊北海タイムス」昭和23年7月11日	1948/07		「人間」に発表された福永の「河」は一部に好評であったが、十年以前の伊藤整その他に較べると取材の世界が古風で技術も新しいとはいえない。（引用）
8	文芸時評	瀬沼茂樹	「新小説」昭和23年8月1日	1948/08		夢、夜、死、母、など一連のロマン派の観念だけで稚く組み立てられたメルヒェンにすぎない。（引用）

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
9	『塔』解説	白井健三郎	『塔』講談社文庫 解説	1973/06		時間的存在である人間の過去への転生と未来への転生とのドラマを支配する超越的時間というものの不可思議なはたらきを追求しようとする、極めて意識的な試みだと言える。(引用)
10	福永さんの中を流れる河	清水徹	福永武彦全小説第4巻月報 福永武彦全集(新潮社)第4巻に所収	1974/02	3	「河」の向こう岸とは、福永さんの根源的な主題である「疵の国」なのだ。「疵の国」におけるアイデンティティの回復、そういう意味での「死」が、福永さんの主人公たちの最大の希望なのである。 「顔のない女(母)」、「海」、「雪」、「鏡」などの特権的イメージの網の目をさらに重層化させてゆけば、想像力の小説的展開により「河」を乗り越え、「疵の国」を眺めようとする福永さんの努力の軌跡はさらにはっきりと浮かびあがってこよう。逆に言えば、これらの特権的イメージを繰り返し変奏することによって、福永さんは、「人は古里を忘れることは出来ない、人は古里に帰ることは出来ない」という人間の逆説的なあり方に(この逆説の中心をなすのが「河」だともいえよう)、可能なかぎりの小説的造型をあたえようと努力しているのである。(引用)
11	著者ノートにかえて福永文学の原点	加賀乙彦	『塔』河出文庫 解説	1984/10	7	福永の初期の短篇小説を、冷たい水のイメージに注目して解説している。以下は、『阿』についての文章からの引用。 『阿』はまさしく水そのものが主題である。母を知らぬ少年は突然現われた父と一緒に暮らすのが父は少年を憎んでおり、少年は突き放されて孤立している。少年が淋しさをまぎらわすために見に行くのが“河”で、それは遥かなほの暗い過去の時間を映す鏡である。少年は、自分を生んだ母の面影を河のおもてに見出そうとする。そして絶望する。絶望のさなか「生きていることは美しい」と少年は思うが、それも河の美に励まされてのことである。 水は冷たく人間を濡らしたり、凍りつかせて失意の底へと誘うが、同時に美によって希望へと引きあげてくれる。水の変容を福永武彦は鋭敏に見詰めて、作品のさなかに結晶させている。(中略) 福永武彦がその創作の初期から、雨、雪、河、湖、海という水のイメージを愛し、それを作品の基調に置いたこと、つまり作品の雰囲気作りだけでなく、作品の構図や主題と水とを密に関連付けていたという事実は指摘しておきたい。作者がそれを自覚しているかどうかは別として、福永武彦は水に異常に親和性をもった小説家であることは、この初期の作品群ですでに読み取れる。
12	福永武彦の人と作品	曾根博義	鑑賞現代日本文学27 井上靖・福永武彦	1985/09	16	上京二、三年後から武彦が大学を卒業するころまで、福永家に住み込んで父子の面倒を見た手伝いの「お玉さん」(「幼年」にも同じ名で出てくる)が、後年、ある人に内緒で伝えたところによると、父末次郎はずっとあとまで筆筒の奥に黄八丈の着物を大事にしまっていたという。この話はただちに武彦初期の短篇「河」を思い出させる。昭和二十二年秋、胸郭形成手術を受ける前に遺書のつもりで書いたという「河」には、死んだ妻の形見の黄八丈を妻によく似た息子に着せてじっと眺め入る男の異様な姿が描かれている。むろんそこには作者の想像が加わっているだろうが、実際の父が、子に亡き母のことを忘れさせようとつとめながら、自身、いつまでも妻のことが忘れられず、子は子で、そうして母の微かな記憶さえもしだいに失われていくことに対して必死に抵抗しようとしていたことはたしかだと思われる。父と子はいわば死んだ母をひそかに奪い合いながらその後の数年間を生きたといえるかもしれない。(引用)

5. 大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永文学における<河> と< 妣の国> —<河>を媒介とした仮 説検証の試み—	二木千恵子	石坂洋二郎研究 第4巻	1982/11	29	<p>本論文筆者の掲げる仮説とは、<福永文学の本質は、常に自己の魂を託すべき何ものかを探り続ける試みである。>ということであり、これは<母なるものへの回帰志向からくる魂の探索の試み>とも言えるとしている。筆者は、福永の主要モチーフである<河>を媒介とした作品『河』、『幼年』、『忘却の河』の検討により、仮説の検証を試みている。</p> <p>『河』において光り輝く<彼岸>は、<僕>にとって<妣の国>に他ならない。<僕>は<本当の生>を望み、<未来>を<お母さん>に託し、<彼岸>を<妣の国><素晴らしい世界>として憧れているのであり、<絶望的な生、死んだ生>を生きている父親とは大きく異なる。</p> <p>『河』と『幼年』における<河>の様相の大きな差異は、『幼年』にあり、『河』にはまだない暗黒意識のモチーフに起因している。一方、『忘却の河』における<河>の様相は、<流れゆくものとしての河>である。</p> <p>著者は福永の小説に登場する少年たちの殆ど全てが<母を亡くした少年>であることを指摘している。(要旨)</p>
2	福永武彦の「父なるもの」 —「河」を中心に	首藤基澄	近代文学論集 第16巻 「福永武彦・魂の音楽（ 1996）」所収	1990/11	10	<p>(本稿の要点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「河」のモチーフは、過去意識に籠絡された父との葛藤である。福永は、子供とともに生きる父ではなく、子供を拒絶し、ひたすら妻の思い出に生きる父を描いている。 ・実生活での黄八丈のエピソード(文献4-4)や、福永の母が弟が生まれた時に死んでいることを考え合わせ、「河」は事実を変形、誇張しながらも、福永の生の真実が盛り込まれたもので、確かに「遺書の代り」に書かれたという作品の重みを感じさせるものになっている。 ・「河」の父が「僕」になぜこも肉親の情を示さないのか。武彦が末次郎の実子ではなかったという福永自身は明かさなかった出生の問題が関わっている。「僕」は父の憎しみを背に受けて、自立を促されているのである。 ・父について、「河」以外に書かなかったのは、父が「徹底して妥協を斥け己が思うままに生き」(源高根)つつ、やはり自分を徹底して自立の方向へ導いてくれたことを認識していたからではないか。孤独を問題にしても、孤独に甘えるのではなく、「英雄の孤独」といい、「孤独を牙城」(『草の花』)とするという福永の強靱さは、「河」におけるこの「父なるもの」を楨杆(こうかん)として形成されたと考えていい。
3	福永武彦「河」 —河と夕焼けを中心に	黒岩浩美	成蹊国文 第30巻	1997/03	10	<p>著者は、「河」、「夕焼け」のモチーフについての先行論文の紹介と検討を行っている。以下は、短篇『河』について述べた文章からの引用。</p> <p>河が父親、夜、過去、死という暗の世界を連想させるものであるのに対して、夕焼けは、母親、未来、生、永遠という明の世界を象徴しているものであると言えよう。河と夕焼けの表す二つの世界は、対立する明暗の世界として象徴的に書き分けられている。</p> <p>「河」において福永は対立する父と子の世界を観念的、象徴的に描きながら、夕焼けと燃える河によって、少年を精神世界という意味で永遠へと旅立たせた。</p> <p>それは「河」執筆時の直後からの、胸部形成手術のための療養所生活の始まりを前にした、またそれ以後においては終生死と隣り合わせにあった作者の、切実なる生への願望でもあったのではないだろうか。</p>